

(下) そして幕があがった

小山内美江子



そして幕があがった (下)

内美江子



そして幕^{まく}があがった(下)

定価 一〇〇円

昭和六十一年六月十五日 印刷
昭和六十一年六月三十日 発行

著 者 小山内美江子

編集人 川合 多喜夫

発行人 関根 望

発行所 毎日新聞社

●一〇〇 東京都千代田区一ツ橋
●五三〇 大阪市北区堂島
●八〇二 北九州市小倉北区紺屋町
●四五〇 名古屋市中村区名駅

印刷 中央精版 製本 佐久間製本

目次

蟹 5

若者たち 43

それぞれに
—

82

茜いろ 111

同棲 140

満二十歳 167

再会 194

旅 223

装帧 水田秀穗

そして幕があがった
(下)

蟹

1

空気が澄んでいるせいか、水平線がくっきりと見えた。

冬の海にしては明るく、たつぷりと潮をふくんだ風も、頬を刺すような痛さはない。

正月の三が日を型通りに過ごす、和泉祐子は大滝のあとを追うようにして伊豆宇佐美の小さな釣宿に來た。

宿の女主人には、あるテレビ局の番組で身上相談を受けたことがある。

もう、だいぶ前のことだったが、律義なその女主人は季節の変わり目には必ず便りを寄こし、こちらにくる折があったら是非とも寄ってください、と書き添えてあった。

大滝と小さな旅行を計画したとき、ひよいと思ひ出したのが、この釣宿だった。

電話をかけると、女主人はお待ちしています、と喜色あふれたふたつ返事で二人の宿泊を引き受けた。

初日の出というものを見られるなら見てみたいと、大滝は一足先に大晦日おおみそかから出かけている。

元日の午後に電話をかけると、宿のもてなしはとても気持ちがいなものだと、大滝の声は明るかつ

た。

大滝の明るさは、そのまま祐子の心を明るくする。四日の朝、彼女はいつもより早く起きると、大滝の待つ海辺の町にいそいそと旅立って来たのだ。

前年の暮れからこの正月にかけての東京は、暗く、寒々しく、得体の知れない不安による沈黙に包まれて、それは戦後すぐに迎えた冬にとっても似ていた。

銀座をはじめ盛り場のネオンが消えて、高速道路の夜間照明も、深夜は間引き点灯が実施されている。おそらく上空から見たら、これがひたすら発展し続けてきた大都市だとは信じられなかったろう。昭和四十八年の秋、第四次中東戦争が勃発すると、アラブ石油輸出国機構が原油の生産減を決定した。国内消費量の八〇パーセントを中東から輸入していた日本にとって、この決定は文字通りの「石油ショック」であった。

さらにこのショックに追い打ちをかけたのが、アラブ側からの原油価格の大幅引き上げ公示である。日本経済はたちまち大混乱に陥った。

生まれたときから物資欠乏の実感を持たない、いわゆる「戦争を知らない世代」はもちろん、高度成長の美酒にあの貧しさをケロリと忘れていた世代も、繁栄の基盤がいかに薄い氷の上に乗っていたかを知らされて、愕然となった。

信じられないほどの素早さで日本全土に戦時中の悪夢が甦って、売り惜しみの店舗が出ると、人々は明日にでもすべての品物がこの世の中から消え失せるかのような幻想に捉われてスーパーマーケットへ押しかけ、洗剤やトイレットペーパーを買いだめようとして怪我人が出るという騒ぎが起こった。政府は石油節約を呼びかけ、ガソリンスタンドは日曜・祭日は閉店したので、頂点に達していたマイカー・ブームは鳴りをひそめ、盛り場のネオンが消えると同時に、各テレビ局も深夜放送の自粛を

申し合わせた。この時期がもし夏であつたら、庶民のパニックもここまではひどいものにはならなかつたろう。

新築住宅にはセントラル・ヒーティングがもてはやされ、ほとんどの家庭も暖房は石油ストーブに切り替わつて、昔ながらの火鉢などつくに姿を消していたから、灯油の欠乏と値上がりは、庶民生活の混乱に拍車をかけた。

去年まではマイホーム主義の象徴でもあつた家族旅行などはパタリととまつてしまい、正月客を当てこんだ観光地は人影もない。マスコミは閑古鳥かんこどりが鳴いている様子を報じている。

この正月休みの旅行は、前々から祐子と大滝との間で話し合っていたものだが、名のある温泉地でも、暖房も温泉も夜の十時までなどという噂が立つてくると、さすがに遠くまで足をのばす気にはならなかつた。

だが、楽しみにしていただけに、諦めるには未練が先に立つて、釣宿の女主人を思い出した祐子が伊豆方面の様子を問い合わせたのである。

新幹線を使い熱海で伊東線に乗り換える。列車はそのどちらにも、空席が目立つた。

ひなびた駅に降りると、改札口でマフラーを巻いただけの大滝がコートも着ずに笑顔で手をふっている。

「十分もかからないから歩きましよう」

祐子の手からポストンバッグを受け取ると、大滝は口もとをほころばせながら肩を並べる。

東京では自分の家の灯油確保だけでもトゲトゲしくなっているのに、釣宿では電気こたつも石油ストーブも、ちゃんと用意してくれているという。

客は大滝だけで、大晦日の晩は宿の家族と一緒に年越しそばをよばれ、元日には尾頭つきの魚やひ

なびた味わいのおせち料理が出たと、大滝はうれしそうに話した。

駅から国道に出ると、もう海が見える。その国道を突っ切り、せり出している崖の下の道をまわると、その崖を風よけにでもしたように湾曲した入江にその釣宿が見えて来る。

山がそのまま海に迫る伊豆独特の風景は、逗子の海とガリリと趣おもむきを変え、いかにも旅に出たという思いが祐子を包む。

大滝のおしゃべりを聞きながら、この男はあれから約十年、元旦に自分の家で手づくりの正月料理を食べたことがなかったのだと、ふと涙ぐみそうになっている自分に気づいた。

六日の夜までに東京へ戻ればいいという大滝と、丸三日が過ごせるのだ。

いつか、そうした旅に出ようと話しながらも、二人にはいまままで、ついぞそうした機会を持つことが出来ずにいた。理由は、いろいろとある。

大滝には勤めがあったし、春休みや夏休みの家族連れでにぎわう行楽地へは、わざわざ出かける気にはならなかった。なぜか二人の旅は冬がふさわしいと思っていたものの、康次郎の存命中は年始客をすっぱかして男と旅に出るわけにもいかなかった。

女主人に案内された二階の一室は、思ったより清潔だった。

窓からはいっばいに静かな海が見え、中年の男女がひっそりと刻ときを過ごすのにふさわしく、祐子は、女主人の誘いに応じてよかったと思った。

おそろく、大滝も同じ思いなのであろう。すでに先着している者の勝手知った様子で、女主人の手も借りずに祐子のために茶を入れている。

そんな様子を見ると、祐子の手土産にいいいに礼を言ってすぐに挨拶を切り上げ、女主人は階段を降りて行った。

こたつに膝を入れ、掌で湯のみのぬくもりを確かめると、さすがにホッとした。

大滝が黙って微笑みかけてくる。

今年、祐子はこうしたささやかな旅を大滝への祝いとして考えていたのだ。

大滝への祝いとは、冬子の成人である。去年、冬子が満二十歳を迎え、その誕生日を期に、二人へ重くのしかかっていた養育費の一人分を送金しないで済むようになっていた。

どのような娘に育ったのか？　と思わないことはなかったけれど、負うべき責任の一端から解放されたという思いが、大滝には強い。小鬢に白いものが目立つようになったほかは、彼の微笑も話しぶりも十年前と少しも変わっていない。或る意味で、二人の情念は燃え上がったときのまま、姿を変えていないのかも知れない。

「あのときは、身を裂かれるように辛かったけれど……」

一緒に暮らしはじめた男のアパートから生家に戻ったときのことを、祐子はいまでもそう大滝に語る。

2

やむを得ず続けた通い婚だったが、それが二人の馴れを防いだのだ。それがたえどという形であつたにせよ、絶対に認めまいとした康次郎は、二年前に亡くなっている。

葬儀のあとで弁護士から示された遺言状では、全財産を康一と加津の二人に譲るとし、たった一人の娘である祐子の相続権をはっきりと除外してあったことで、祐子は改めて父の怒りと嘆きの深さを知り、大滝の胸で声をあげて泣いた。

その大滝を、康次郎は終生、女のヒモだといつてはばからなかった。

夫であつた英雄からは、康次郎の死後、署名と印鑑を押捺した離婚届が送られて来たが、祐子への憎しみが消えてのことか、康次郎への恩義として生前は戸籍上の夫婦で通したのか、祐子には英雄の真意を確かめるすべがない。

英雄は八年前、シンガポールへ単身赴任してからも、本社での会議で数回帰国はしている。

しかし、その後一度も田園調布の家に立ち寄ることなく、都心のホテルに投宿して、康一とだけ食事をともにしたことがあるらしい。

その康一もまた、父親の逐一を祐子に報告するような息子ではなくなっていた。

いわゆる多感な年頃の箱入り息子として、誤認逮捕事件は彼の人生に少なからぬ衝撃を与えている。康一は無意識に、敵の娘である冬子に救いを求めたけれど、仲介者である邦枝から、冬子に再会の意志のないことを伝えられることで、立ち直るすべての手がかりを失ってしまった。

当時の大学は依然として学園紛争の中にあつて、康一の足は自然とキャンパスから遠ざかり、或る日突然、ポストンバッグ一つをぶらさげて海外旅行に出かけた。

行き先は父親のいるシンガポールである。むろん一週間ほどで帰国したが、それが病みつきのようになつて海外へ出て行く。

康次郎との会話は失われていて、康一が何を目的としているのか分からず、その心労が康次郎の病状を悪化させたことは確かだった。

けれども、祐子も康次郎になり代わつて康一の考えを訊きただせる母親ではなくなっている。

確かに大滝を得た。だが、失つたものがあまりに大きい——、そう考えるのをやめてから何年になるだろう。はじめに決意した通り、女の業とともに生き抜こうと、いまは腹も据わっている。

それだけに、セミプロでしかなかった受賞作家の道は甘くなかったことになる。

影の濃い不倫を書いて、一度は見直されたものの、裁判中にそれが問題となって筆を縛られると、祐子にはほかに得意とする作品の分野がなかった。

それが編集者にはもどかしく映るのだろう。長年コツコツと同人誌に書いていただけに、文章力もあるし、勢いに乗って躍り出た若い作家よりは物も知ってる。けれども、社会に向ける目は決して鋭いほうではない。

受賞作家・和泉祐子の名に或るイメージを定着させようと、編集者はやっきになるのだが、祐子にはいまさら洒落たラヴ・ロマンスは書けなかった。

純文学で押し通すのがいちばん祐子らしいのだが、それでは収入増にはつながらない。父のこと、康一のこと、そして自分の業など、意欲を感じる題材は、必ず裁判のときと同じように、誰かを傷つけずにはおかないだろう。

地味な作風の地味な作家は、受賞という勲章だけでは積み残されて行く。

だが、この数年の好景気で、大小を問わず出版社は多くの雑誌を発刊していた。だから、落穂拾いといって、少しでも残光を残し、或いはレットルを貼る余地のある作家を専門に仕事を依頼してくる出版社もある。

釣宿の女主人と出会ったテレビ身上相談も、そうした仕事の一つであったし、祐子が母親であったことから、受験雑誌からも少年少女たちの悩みを聞くコーナーという欄を依頼されたりした。

あとはエッセーと紀行文である。不得手な現代風小説を書くよりはるかに気が楽だったし、祐子はそうした仕事を積極的に引き受けた。

「ゴミのようなもので断らない人」という、彼女に対する風評も耳に入ったが、無視することが出来た。小さな仕事と取り組むことで、生きている多くの人に会える機会を得たからだ。私小説作家と

しての守備範囲の狭さも、小さな仕事の積み重ねで視野も大きく広がると信じたし、大滝にも励まされた。

実際、身上相談で、離婚率の増加と離婚した女たちの生々しい性の悩みを知ったことも大きな収穫であったし、そうした事実も小さな仕事をしていなければ、終生知らずに通りすぎてしまったことだ。いつか――、それらを集大成したものを書こう。それまでは、祐子は何としても大滝との生活を守るだけの収入を得なければならぬ。

冬子の成人は、それだけに肩の荷が一つ降りたという正直な喜びだったのだ。

はじめての晩は、波の音が耳について眠れなかった大滝は、祐子を迎えた安心からか、おだやかな寝息をたてている。ほのかな明りの中で、その寝顔を見詰めて見飽きない。この感情は、一体どこからくるのだろう。祐子はそっと、毛布の衿を引き上げた。

R町のアパートに転がり込んだ日のことが思い出される。

大きな期待を持たずに選んだ宿ではあったが、大滝との二人旅には、こうした隠れ宿のような場所がふさわしく思われる。身を寄せると、大滝は眠りの中から手をのばして来て、祐子の肩を抱いた。

どんな夢を見ているのだろうか……。男の軀は暖かく、規則正しい鼓動が伝わってくる。

その鼓動と波の音が重なって、大滝と同じ夢を見たいと願いながら、祐子はゆっくりと眠りの中に落ちて行った。

それより数時間前、羽田空港をとび立ったジェット機の中に、邦枝がいた。ひと眠りすればサンフランシスコだ。

寝酒のつもりでサービスを受けたブランドーを舐めながら、電話で交わした吉沢の言葉を思い出していた。

「いい機会だから行って来なさい。石油ショック下のアメリカをその目で見ておくのも、君みたいに自分の世界を表現する仕事の人には、大切かも知れないし」

吉沢と最後に会ったのは、その石油ショック騒ぎが始まったばかりの、二カ月ほど前になる。

好調な昇進で部長に就任した矢先の出来事で、あわただしく約束の場所に姿を現した吉沢は、連日の会議のせいか疲れた顔をしていた。

「これからの日本経済はどうなるか分からないが、景気が冷え込むのは確かだろう。けど、宣伝という奴は、景気が悪くても好くても販売戦略には必要なものだから、ま、君の仕事にはそれほど大きな打撃はないと思う」

ときには友だちであり、兄妹のような情人関係が続けて来た邦枝は、このときの吉沢にそのすべてを感じて、ほろ苦く笑ったものだ。

あれ以来、吉沢は企業と企業、男と男の激烈な戦いの中で全力をふりしぼっているに違いない。ひと息ついたときには、吉沢のほうから連絡があるだろう。それまでは、デートはしばらくお休みにしようと思っていたときに、アメリカ行きを誘われた。

相棒は、隣の席で軽く目を閉じている新劇女優の岡野えり子である。

友だちとブロードウエーの芝居を観に行く予定だったのが、急に本来の相棒の都合が悪くなったらしい。

すでに旅行社に費用を払い込んでしまっていることだし、もし、よかったらと声をかけられたのが暮れのことだった。

以前に書いた絵本がきっかけで知り合い、彼女の一人芝居の舞台装置を、手がけたこともある。しかし、邦枝の心が動いたのは、長い間パリで制作活動をしていた銅版画家の江之浦信吉が、制作の場をサンフランシスコに移したというニュースからだった。

ふと気づいて見上げると、スチュワードスが微笑でうなずいている。

コックピットの見学を頼んでおいたのだ。他の乗客に気づかれないように案内されると、一万メートルの上空からさらに見渡す夜空は、黒でもなく青でもなく、菫色すみいろを溶かし込んだような薄墨色うすずみで果てしなく広がっている。

あれです、と指されたジャンボ機の正面風防窓の真正面に、明けの明星が輝いている。それは不思議な青さで、邦枝の網膜に灼やきついた。

3

邦枝にとって、サンフランシスコはじめての土地である。

あわただ慌しくヨーロッパに旅したことはあったが、プライベートな海外旅行をゆっくりと楽しむ余裕は、彼女にはなかった。

邦枝がイラストレーターとして一本立ちし、この世界を歩きはじめたとき、日本はまさに高度成長真っ盛りの時代で、スポンサーは惜しみなく金を出し、広告業界は、空前の活況を呈していた。

美佐子が芳光との再婚を諦めて、女であることの幕を閉じた頃、邦枝はクリエーターとしての、性別を超えた実力の競い合いの真っただ中にいた。

大手の広告代理店に所属していた同業者たちが、好況の波の中で次々と独立しはじめた。